

福岡女学院大学紀要 人文学部編 第24号  
2014年3月

# 福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み

二階堂 整・守山 恵子

# 福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試み

二階堂 整・守山 恵子

## 1 はじめに

現在、どの大学でも初年次における教育が重視されてきている。本学でも以前から少人数ゼミ形式による1年次の授業が行われている。メディア・コミュニケーション学科では、特に、論理力養成を重視して、小論文・レポートの書き方を学ぶ授業を行ってきた。

本稿は、このメディア・コミュニケーション学科における初年次教育の試みの報告であり、提案である。

## 2 福岡女学院大学人文学部における初年次教育の取り組み

女学院大学・短大では以前から、少人数ゼミ形式による1年次の初年次教育の授業が行われてきた。ここでは、メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の活動について述べるため、人文学部にしほり、教育の流れをたどりたい。いわば、学科の教育活動の前史にあたる部分である。

2001年4月、人文学部は日本文化学科・英米文化学科を改組し、表現学科・現代文化学科の2学科として、スタートした。その際、学部の初年次教育科目として、1年次必修の少人数ゼミの日本語コミュニケーション技法Ⅰ・Ⅱ（前・後期）がスタートした。「話す・聞く・読む・書く」をテーマにし、

総合的に「考える」ことをめざす授業であった。初期は専任教員のみが担当していたが、担当コマ数の関係もあり、非常勤講師も交えての授業となっていた。表現学科では、2006年4月から基礎ワークショップ（必修・隔週開講・年間授業・1クラス15名前後）をスタートさせた。2年次に基礎演習・3年次に演習・4年次に卒業研究という学科のゼミの流れができていたが、これに1年次の初年次教育の基礎ワークショップを加えたのである。すでに初年次教育として、学部の日本語コミュニケーション技法という授業があり、ある意味で二重になるのであるが、①基礎学力養成のためには、より一層、学ぶ場があるべき、②アドバイザーとして、1年次から学生を把握したいとの2点から、学科のほぼ全専任教員が科目負担増になるにもかかわらず、開講することとなった。①については、入学学生の学力不足が懸念されてきたことがある。表現学科では、2006年度より入学時の4月に日本語テスト（注1）を実施してきた。日本語の基礎力を測定するテストで、高校3年以上・高校2年・高校1年・中学3年・2年・1年以下の6段階の日本語力が判定される。大学の授業についていくためには、高校2・3年生レベル以上が必要とされているが、テストでそれ未満の学生の存在がわかってきた。基礎的な学力養成強化のための科目開設の必要性が明らかになったのである。これ（学生の学力状況）と関連するのが②の学生指導である。本学の場合、以前から、アドバイザー（クラス担任のようなもの）制度をとっており、1年から4年まで、学生に対すアドバイザーが決まっていた。2年生以上ではゼミ担当教員がアドバイザーであるが、1年次は10数名ずつのクラスを作り、そこにアドバイザーがつく。しかし、アドバイザーがクラスの授業を持たないことがあり、学生を把握しにくく、問題となっていた。そこで、この問題を解消するためにも専任教員の1年次科目として基礎ワークショップを置くこととなった。授業は学生の基礎的な学力養成と学生指導の2点を目的としたことにより、専任教員が1年次の授業を担当することで学生の把握もしやすくなり、学生指導も効果をあげるようになった。授業の内容は各担当教員にまかされ、ノートを取り方・資料の探し方などから、レポートの書き方・発

表の仕方、読書会など様々であったが、学科の会議の中で実施内容を互いに報告することで、情報交換に努めた。この科目で様々な試みをしてきたことが、次の段階につながった。

### 3 メディア・コミュニケーション学科における初年次教育の取り組み

#### 3-1 2012年度の取り組み

メディア・コミュニケーション学科（2013年度開設）での初年次教育は、直接的には、2012年度の表現学科の基礎ワークショップに始まる。

表現学科の基礎ワークショップを続ける中で、もう少し内容を絞って、統一した授業を実施する必要性を感じるようになってきた。授業で、手紙の書き方などを教えると学生は非常に喜ぶ。「今まで学んだことがなかった。これから、とても役立つ」などの感想が出てくる。大切な事項ではあるが、それを基礎ワークショップで教えるべきか、授業の趣旨にふさわしい内容であるかという疑問が出てきた。また、学科学生が上位学年になっても、発表や論文の内容をみると十分な力が身につけていない、発表や論文とは何か十分に理解できていない学生が見られるようになってきた。幸い、福岡女学院の活性化助成金が支給されることとなり、二階堂・守山の2名で、まず、モデルとなる基礎ワークショップの授業形態を作り、実施してみることとなった。

初年次教育といっても、その内容は様々であり、1年間で教えられることは限られている。そこで、前述の問題点をふまえ、内容を絞って、小論文の書き方を1年間、教えることとした。卒業研究への取り組みや各学期の論文提出、また社会人になった際にも企画書の書き方などで、役立つようにとの考えである。最終的には論理的な力が不足する学生に、その力を身につけさせることを目標とし、具体的な内容は小論文作成を学ぶことで達成されると考えた。クラス独自授業と2クラス合同授業を交互に行い、独自部分は、2名の教員がそれぞれの内容（例えば、読書会など）をクラスで行い、合同授

業では、小論文の書き方を学ぶ授業を行った。

二階堂・守山は、さらにつくば言語技術研修所（注2）にて、教員用の研修を1年間、受講した。最近、初年次教育用の教科書は増えてきているが、論文執筆については、ある章で取り上げるといった形で、十分でない。例えば、論文ワークブック（注3）などはその目的だけの教科書であり、練習問題も多く、有用であるが、はじめて学ぶ1年生にとっては、やや難しいのではないかと思われる。また、欧米では、日本の小・中・高にあたる教育の過程で、論理や言語技術（注4）を学ぶ機会がある。それを踏まえて、英語用のパラグラフライティングやアカデミックライティングの教科書が執筆されていると思われる。大学で教える場合、学生はそうした大学入学以前の教育がない段階であることや、教員も授業で学んだことがないことをふまえることが重要と思われる。つくば言語技術研修所では、教員を対象としての研修であり、そうした言語技術を学ぶことができた。論理の力を身につけさせるために、論文の書き方を学ばせるために、どう教えるかを学ぶことを目標としていた我々にとっては、初歩からの研修で、大変、役に立った。ほぼ、毎回、課題があり、それが、添削され、戻ってくることで、不足する点や問題となる点が理解され、大学に帰って、自分が実際に授業を行う際の参考になった。

実際の授業は以下の形で行った（末尾資料1参照 表現学科もメディア・コミュニケーション学科もほぼ同じ形式）。毎回の授業で、冒頭の10分ほどを使って、漢字のテストと時事問題の小テスト（注5）を実施した。その場で学生同士の交換による自主採点をさせ、それも成績評価の1つとした。漢字は、使用する教科書（注6）から出題し、そのことで、教科書を読む癖も身につけるようにさせた。また、必ず、楷書で書くように指示し、少しでもそれからはずれる書き方がある場合は、×にした。学生は漢字テストでありながら、楷書で書く癖が身につけておらず、繰り返し、注意を促した。時事問題の小テストは、学生が世の中の動きに関心を持つよう、新聞を読むようにする目的があった。また将来的に就職試験時になってあわてることがない

ようにとの考えもあった。学生は新聞を読まない、テレビのニュースでさえ見ないということが多い。また家庭においてさえも新聞を購読することが減っており、こうした点を少しでも補えればと始めてみた。朝日新聞のものは、最新のニュースを対象に問題形式になっているものがあり、利用しやすかった。

小論文については、学生が書き慣れていないということと、教員の添削の負担を減らすことから、毎回、400字原稿用紙1枚を書かせることとした。授業の最後に課題を発表、1週間後に提出、それを1週間内に教員が添削し、次の合同授業時に返却。授業で問題点指摘や不足する点などを解説した。教員の添削で終わることのないように、学生は添削を踏まえて、書き直しを再提出するようにした。この場合、教員も学生もたえず、2つのレポートを抱えているような状態になるが、慣れてくれば、お互いに作業は早く進むようになり、こなすことができるようになった。よく、学生は添削して返しても、その添削を読まないという問題が指摘されるが、再提出することで、いやでも学生は添削を読まざるを得ず、回を重ねるごとに、内容が向上していった。その点からも効果があったのではないと思われる。また小論文執筆に慣れない学生にとって、添削だけでは、どうすればいいかが分からない場合があると考え、課題ごとに添削後、模範文を配布、解説を行った。また、小論文提出の際には、必ず、チェックシート(末尾資料2参照)も提出させた。チェックをすることで、注意するように促すだけでなく、もし、チェック項目の違反がある(例 誤字・脱字)場合は、違反が1つでも全体の評価をD(不合格)とした。厳しい措置であるが、学生は注意して書くようになった。チェック項目は、前期の最初は極めて形式的(改行・誤字など)なことにし、後期は内容(序論・本論・結論の三段構成になっているかなど)にかかわることを入れるなどと調整していった。添削の際は、問題個所にはチェック項目の番号だけを書けばよく、効率的に添削ができるようになった。最近では、パソコンで書くことが普通で、ネットから提出・管理するシステムもある。本学にもそうしたシステムがあるが、この授業に関しては、必ず、400字原稿用

紙を使った。基本となる、原稿用紙の使い方を身につけてほしいとの考えからである。

2012年度の主な課題は、出題順に、「博多の土産は何がいいか」、「AO・推薦・一般入試それぞれの利点・欠点」、「首相は公選制にすべきか」、「18歳から選挙権を認めるべきか」であった。出題にあたっては、学生が混乱しないように、また注意すべき点がわかるように条件付けや解説をつけた。例えば、博多の土産の場合、「東京に家族と住み、博多はよく知らない幼馴染の友人に、その日に渡す」と条件を付けた。入試の場合は、誰の立場から論ずるか注意を促した。次節で詳しく述べるが、出題を何にするかは大きなポイントである。上記後半の出題2つに関しては、学生にとって難しく、ネットで資料をさがすため、結果として、類似の内容になるものが多かった。400字という短いものであるが、必ず、序論・本論・結論の三段構成とすることに注意させ、各論で書くべき内容も繰り返し述べた。注の書き方や参考文献の挙げ方も説明し、学生が理解できるようにした。ネット情報は、URLの表記、アクセス日の記入、どんなページかを書くように指示した。毎回、チェック項目違反でD（不合格）を出したり、何度も同じことを注意したり（例えば誰の立場からの記述か）することが続いたが、1年後期試験では、他科目担当の教員から学生の提出レポートがレポートらしくなったとの言葉もいただき、多少なりとも効果があったと考えている。

### 3-2 2013年度の取り組み

2013年度、表現学科は言語芸術学科とメディア・コミュニケーション学科の2学科に改組した。二階堂・守山はメディア・コミュニケーション学科に所属し、この学科で新たな初年次教育を試みることになった。幸い、学院から続けて学院活性化資金を得ることができ、この年は、モデルの完成と内容の拡大をめざした。

メディア・コミュニケーション学科は定員50名、1年次は3クラス編成とし、二階堂・守山の他にもう1名、教員が参加し、教員3名、1クラス18名

前後でスタートした。新たにもう1名の教員が加わり、一緒に学び、教えることで、この教育の共有・拡大を図ることがねらいの1つであった。結果として、連絡を密にすること、お互いの内容を知らせ合うことで共有ができ、新たな教員も交えて、授業を行うことが可能であることがわかった。ただ、クラスの学生の人数としてはやや多い数となった。今までの経験から12名程度が理想、15名までが適正人数、それを超えると添削などでやや負担を感じるようになるのが実感である。

2013年度も、2012年度同様、クラス独自授業と3クラス合同授業を交互に実施した（末尾資料1参照）。ただし、独自授業でも小論文の書き方にふれざるをえず（講評・注意点解説など）、独自に授業する部分は少なかった。授業冒頭で、漢字テスト・時事問題テストを実施。前期はチェックシートを利用しつつ、400字で小論文を書く作業を実施した。前期の出題は、「博多の土産は何がいいか」、「小学校での英語必修化について」、「学食の箸はプラスチック箸がいいか、竹箸がいいか」、「映画を見るなら、映画館がいいか、自宅がいいか」である。後期末に学生にアンケートを実施し、論題が適切だったか尋ねたか、こちらの考えとのずれがあって、学ぶ点があった。「土産はあまり買った経験がない」、「入学して福岡にすむようになったばかりで、博多の土産と言ってもピンとこない」、「映画はあまりみたことがない」といった「知らない・経験がない」ので書きにくいといった声があった。また、「資料が多すぎて、（あるいは）少なすぎて書きにくい」という意見や、「すぐ白黒つかない内容は書きにくい」、「良い面と悪い面が同じくらいあり、決定的な証拠がないと書きにくい」との意見もあった。特に最後のものは、教員としては、それこそがいい論題（例 学食の箸は環境面の観点から、プラスチックでも竹でも利点がある）と考えがちであるので、出題する際、学生の考えとの距離に対し、配慮が必要と考えている。

後期は、前期の発展形を考えた。岩波ブックレット（注7）をクラスごとに1冊決め、それを要約し、賛成・反対の立場でグループ発表、最終的に個人が小論文作成という内容にした。ブックレットのテーマは、小学校英語・

全国学力統一テスト・デジタル教科書の3つである。いずれもその実施に反対や疑問を呈して執筆されているため、テーマに関して、発表では反対の立場・賛成の立場の両方を経験させ、最終的な小論文では、どちらの立場でもいいとした。クラスを3グループに分け、要約では、まず、グループごとに1～2章を担当して400字に要約させた。それらを参考にしつつ、最後に各自で、1冊を400字に要約させた。最後の段階まで来ると小手先のやり方では要約できず、内容を咀嚼した上で自分の言葉に置き換えて書くことが必要になり、語彙の不足も実感され、要約はよい学習となると思われる。しかし、学生の要約の中には、テキストの言葉・文章に引きずられた表現が見られ、もう少し事前の訓練が必要と思われた。1クラス3グループで、1つのグループが6人前後となるが、この6人で、発表の準備をさせた。まずはテキストの意見に賛成の立場でレジュメを作成し、クラスで3グループの発表、さらに反対の立場で同じ作業の繰り返しを行う。節目では合同発表会を行い、他グループのレジュメ内容や発表方法が参考になるようにした。この過程で、学生は、参考資料の調査、グループ内での意見の集約、レジュメの作成法、発表の仕方を学ぶようになる。グループ活動では、参加度の差がでるのはやむを得ないが、「人の意見を聞くことが勉強になった」との声がアンケートに多くあげられていた。それらの活動をふまえた上で、各自が反対または賛成の立場から1200字以上（資料は字数に含まず）の最終小論文を提出した。末尾資料（資料3・4）は、ある学生が、前期の最初の頃に書いた400字の「博多の土産は何がいいか」と最後の1200字以上の「全国学力テストに賛成か反対か」である。2つ目のものは論文の形式を守り、内容もまとまっている（注8）と思われる。後期、学生は、発表を含めると最低でも3回はこの課題についてまとめることとなり、どの小論文にも、冗漫な文章は見られなくなった。

1年間を振り返って、アンケートの中から学生の多かった意見を拾えば、学んだ意義を問うた項目で、「論理的な文章の書き方を学ぶことができ、有意義だった。今後、社会に出るとき役立つと思う」などの記述がみられた。

反省すべき点として、「添削はできるだけ具体的に書いてほしい。どうすればよくなるのか、具体的に示してほしい」の声があり、問題点の指摘だけでは不足とのが分かった。また、「指導の中で、三人の先生の違いがあり、戸惑った」との声もあり、注意すべき事項と思われる。添削で偏りや違いがないように、時々、添削するクラスを変えたり、添削の結果をコピーして交換したりしたが、この点は、まだまだ不十分であったと反省している。

#### 4 他大学訪問

後期はいくつかの大学を訪問して、初年次教育について、教えを請うた。この訪問から、本学科のおかれた状況や長所・短所がわかってきた。

訪問先は、国立・公立・私立、また小規模大学から大規模大学まで様々な大学である。どの大学も初年次教育を重要な問題と考え、様々な取り組みを行っていた。と同時に、その内容は多種多様にわたり、1つにまとめられるものでもないことがわかった。どの大学もそれぞれの事情をかかえ、それにそった教育が行われている。

大規模大学の場合、初年次教育をセンター形式で運営している場合が多かった。その教育を担当する専門の機関があり、そこが授業全体の統括を行っていた。この場合、非常勤を含む教員が担当することになり、適正な受講人数を考えて授業数を開講することができる。また、担当する教員も関係する学問分野（言語学系など）であるなどが可能となる。本学の場合、小規模であるため、1年次には、アドバイザーとしての機能も考えて専任教員が担当し、学科学生の把握ができるという長所がある。しかし、担当できる教員が持ちコマ数の関係で、特定の教員に限られてしまう。このことは、特定教員の負担を生み出すこと、専門が科目とあまりつながりがない教員が担当する場合があること、受講人数を減らそうにも担当教員数が限られているため、それができないという問題を発生させる。逆に、大規模大学のセンター形式の場合、1年次の教育内容を上位学年にどうやってうまくつなげていくかが、

課題となっていた。この点においては、小規模の本学が有利な点かと思われる。学科教員が担当するため、学科全体で他教員とも情報を共有しやすく、上位学年への継承も行いやすい。メディア・コミュニケーション学科の場合、現在の一期生・1年生がようやく初年次教育を終えたばかりであり、学科でその成果を報告・共有することに努めている最中である。今後、上位学年においても、論文提出の場合、チェックシートを使用することなどを考えている。レジュメに関しても、すでにブックレットの課題で作成・経験済みであり、上位学年でもそれを踏まえたところから開始することが可能であると思われる。また、自学科学生のみで授業をするので、学科の特色を生かすことができる。例えば、学科に関連する課題を選ぶなどである。今回の他大学訪問で本学科で初年次教育を行う長所・短所を把握することができた。これらを踏まえて、教育内容を発展させることを考えていきたい。

いくつかの大学で共通することとして、大きな外部資金（現代GPなど）を獲得し、それをきっかけにその後の初年次教育を軌道にのせているといったことがよくきかれた。また、どの大学でも採点などの基準を統一するための努力を行っていた。具体的には勉強会の開催などである。こうした点は本学でも学ぶべき点であると思われる。

訪問において、どの大学も忙しい時間にもかかわらず、諸先生方が話を聞かせてくださり、資料だけでなく、場合によっては授業も公開して下さった。また、理系の実験におけるクッキングブックにあたる内容（注9）を示していただけたこともありがたいことであった。初年次教育のテキストだけではわからない点や授業報告書だけでは見えてこない点もご教示して下さることが、たびたびであり、記して感謝する次第である。

## 5 終わりに

本学科の初年次教育は始まったばかりであり、これからが肝要と思われる。小論文を添削し、それをもとに学生が再度、書き直して提出する点などは、

教員の負担が大きい、大きな長所であり、継続していきたい。また学科で情報や負担を共有するためにも、担当教員のうち、3名は固定し、あと1名は毎年、交代しながら、全体としては全教員が担当・経験するシステムにしていきたい。さらに上位学年にいかに関与を引き継ぎ・継承していくかの工夫がさらに必要だと思われる。

初年次教育の内容は様々で、小論文の書き方だけでいいのかという点は残るが、この内容を教えるだけでも1年間で精いっぱいであった。現時点では、初年次教育では内容を絞り込んで、繰り返し教える方が効果が高いのではないかと考えている。また小論文を書くことは、論理的な力を養成することにもつながると思われる。

表現学科の時点から、様々に各教員が初年次教育の内容を工夫してきたことが、現在につながったと思う。表現学科所属だった教員の皆さんに感謝すると同時に、これからも、学生の事情に合った初年次教育内容を考えていきたいと思っている。

#### 注

- 1 現在は、旺文社の「学習成果到達度システム」におけるテストを利用。4月入学時、学科新入生全員実施。1月には、1～3年生へ実施。  
<http://www.obunsha.co.jp/06/cramschool/AchievementSystem/top.html> 2014/1/9
- 2 つくば言語技術教育研修所 <http://members.jcom.home.ne.jp/lait/> 2014/1/9
- 3 参考文献 浜田麻里他1997
- 4 言語技術「思考を論理的に組み立て、相手が理解できるように分かりやすく表現すること（つくば言語技術教育研修所 HP より）。」
- 5 朝日新聞 時事問題ワークシート使用。<http://mana-asa.asahi.com/worksheet/> 2014/1/9
- 6 参考文献 大島2005
- 7 使用した岩波書店のブックレットは以下の三冊  
新井紀子2012『ほんとうにいいの？デジタル教科書』  
清水宏吉2009『全国学力テスト—その功罪を問う—』  
大津由紀雄他2002『小学校で英語？』
- 8 ただし1つ目の理由の根拠（2006年と2007年の結果がほとんど変わらない）について

は出典資料の以下の記述が記載されておらず、わかりにくくなっている。

「20年度調査は19年度と比べるとやや難しい内容となっており、各教科の平均正答率が低くなっているが、過去の調査と同一問題の正答状況等を考えると、学力が低下しているとはいえない」

「過去の調査と同一問題の正答率を見ると、多くの問題で大きな変化が見られないか、高くなっている」

9 例えば、本学科でも行っているが、授業資料のファイル化などである。

### 参考文献

浜田麻里他1997『論文ワークブック』くろしお出版

二階堂整2000「国文科表現法の記録－ディベートを中心に－」『福岡女学院短期大学紀要』36

大島弥生他2005『ピアで学ぶ大学生のための日本語表現』ひつじ書房

二階堂整2008「表現学科「ワークショップ表現H」の試み－1年次における基礎教育について－」『福岡女学院大学 教育フォーラム』10

三森ゆりか2013『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』大修館

本研究は、以下の2つの学院活性化基金による助成による。記して感謝申し上げる。

2012年度 「初年次教育の方法論確立及び基礎力養成とその効果測定に関する研究」

2013年度 「初年次教育に関する研究－実践・向上・共有－」

大学訪問では以下の大学を訪れた。お忙しい時にもかかわらず、快くお話をきかせていただいた諸先生方に感謝する次第である。

石巻専修大学・鹿児島大学・京都西山短期大学・佐賀大学・千歳科学技術大学・富山大学・弘前大学・弘前学院大学・北星学園大学・山口県立大学（五十音順）

福岡女学院大学メディア・コミュニケーション学科における  
初年次教育の試み（二階堂・守山）

資料 1

メディア・コミュニケーション学科  
2013前期入門ワークショップⅠ  
授業計画

月日	内 容	課 題
第1回 合同	クラスオリエンテーション、 原稿用紙の使い方、 課題の説明、テキスト第1 課（レポートとは）	提出用シート第 1課①と② 小論文（小学校 英語）ワーク シート㉗
第2回 合同	図書館オリエンテーション	
第3回 クラス 別	ワークシート㉘漢字テスト クラス独自の活動、学び	ワークシート㉘
第4回 合同	漢字テスト①（テキスト第 1課） テキスト第7課（パラグラフ）	小論文A（博多 の土産）
第5回 クラス 別	ワークシート㉙漢字テスト テキスト第2課（根拠） クラス独自の活動	ワークシート㉙
第6回 合同	漢字テスト②（テキスト第 7、2課） テキスト第3課（マップ）	小論文A書き直し 小論文B（学食 の箸）
第7回 クラス 別	ワークシート㉚漢字テスト 宿題Bの補足説明など クラス独自の活動	ワークシート㉚
第8回 合同	漢字テスト③（テキスト第 3課） テキスト第4課（情報の整理）	小論文C（映画 を見るなら）
第9回 クラス 別	ワークシート㉛漢字テスト 宿題Cの補足説明など クラス独自の活動	ワークシート㉛
第10回 合同	漢字テスト④（テキスト第 4課） テキスト第5課（アウトラ イン）	小論文B書き直し 小論文D（小学 校英語）
第11回 クラス 別	ワークシート㉜漢字テスト テキスト第5課の補足 クラス独自の活動	ワークシート㉜
第12回 合同	漢字テスト⑤（テキスト第 5課） テキスト第6課、第7課 （アウトラインと文章化、 パラグラフ）	小論文C書き直し
第13回 クラス 別	ワークシート㉝漢字テスト テキスト第6課 クラス独 自の活動	ワークシート㉝
第14回 合同	漢字テスト⑥（テキスト第 6課） ワークシート㉞漢字テスト テキスト第8課（本文を書 く、図表）	小論文D書き直し
第15回 合同	テキスト第8課、第9課、 第10課（引用など）	

メディア・コミュニケーション学科  
2013後期入門ワークショップⅡ  
授業計画

月日	内 容	課 題
第1回 合同	合同オリエンテーション 授業計画説明	ブックレットを 読む。 1人1章(200字)
第2回 合同	漢字テスト① 要約とは、要約の方法	ブックレットの 内容要約（400 字程度）
第3回 クラス 別	漢字テスト②、ブックレ ットの内容確認、質疑 グループでブックレットの 内容要約比較検討（3グ ループ） （代表者を1名決定、グ ループで内容改善）	
第4回 合同	漢字テスト③、内容要約発 表会（3×3クラス） 文献探索法・資料探し、情 報カード作り	
第5回 合同	漢字テスト④、レジュメの つくり方 グループごとに資料の分担 決め	
第6回 クラス	漢字テスト⑤ グループ発表準備（賛成）	発表のためのレ ジュメ（グルー プで一つ、作成 責任者は発表者）
第7回 クラス	漢字テスト⑥ グループ発表（発表担当各 2名）、質疑	ブックレット （1～25ページ） 漢字テスト⑦各 自1枚作成
第8回 クラス	漢字テスト⑦ グループ発表準備（反対）	発表のためのレ ジュメ（グルー プで一つ、作成 責任者は発表 者）ブックレ ット（26～50ペ ージ） 漢字テスト⑧各 自1枚作成
第9回 クラス	漢字テスト⑧ グループ発表（発表担当各 2名）、質疑	ブックレット （51ページ～） 漢字テスト⑨各 自1枚作成
第10回 クラス	漢字テスト⑨ グループ発表準備	発表のためのレ ジュメ（グルー プで一つ、作成 責任者は発表者）
第11回 合同	グループ発表（発表担当各 2名） 6グループ	
第12回 合同	漢字テスト⑩ グループ発表（発表担当各 2名） 3グループ	レポート（1200 字以上）
第13回 クラス	振り返り	
第14回 合同	レポート返却、解説 まとめ	
第15回 合同	日本語テスト	

## 資料2

13年度 メディア・コミュニケーション学科 クラス( ) 番号( ) 氏名( )

### 論文チェックシート

提出前にチェックすること

7/16 改定

小論文題: \_\_\_\_\_ 月 日 提出

- ( ) 1. 1行目に題、2行目に氏名、3行目から本文となっているか。
- ( ) 2. 漢字は楷書で書いたか。誤字はないか。
- ( ) 3. 「だ」「である」体の常体文になっているか。「です・ます」は使ってはいけない。
- ( ) 4. 話し言葉(「でも」「だって」など)が混じりこんでいないか。
- ( ) 5. 略字など(テレビをTVなどとする)を使用していないか。
- ( ) 6. 「・」「、」「。」は1マスとっているか。特殊な記号(！や？等)を使っていないか。
- ( ) 7. 体言止めを使っていないか。
- ( ) 8. 読点(「、」)が多すぎたり、少なすぎたりしていないか。
- ( ) 9. 改行が多すぎたり、少なすぎたりしていないか。
- ( ) 10. 文の初めと終わりが、ちゃんと呼応しているか。  
(悪い例: 私の夏休みの思い出は、映画を見て楽しかった。良い例: 私の夏休みの思い出は、映画を見て楽しかったことである。)
- ( ) 11. 文量は全体の8割以上となっているか。(例: 400字詰原稿用紙なら本文16行以上)
- ( ) 12. 書き終えた後、声に出して読んで点検したか。
- ( ) 13. 序論・本論・結論の三部構成になっているか。
- ( ) 14. 論述の際、ラベリング(論点は何か)とナンバリング(論点はいくつあるか)が明示されているか。

以上は、形式面での留意点である。提出課題に上記のミスがあれば、不合格となる場合がある。

資料3

## 博多のお土産

HM130××× ○○ ○○

私が友人にあげたい博多のお土産は「博多通りもん」である。これには二つの理由がある。一つは和菓子が苦手な人でも食べやすいからである。このまんじゅうには生クリームやバターが入っており、和菓子ではなく、和スイーツなのだそう。和菓子と西洋菓子の良いところが組み合わさっているので和菓子が苦手でもおいしいと感じるだろう。二つ目は、多くの人がこの商品のおいしさを認めているからだ。世界の食品コンクール、モンドセレクションで十三年連続金賞を、特にそのうち七年は最高ランクの特別金賞を連続で受賞している。世界的に認められているので幅広い人々の受けが良いと考えられている。渡した友人本人だけでなく、友達の家族も一緒に楽しめるものだと思う。以上のことから、私が友人に博多のお土産として渡したいものは、「博多通りもん」である。

## 全国学力テストに対する反対意見

HM130××× ○○ ○○

私は全国学力テストを行うことに反対である。莫大な費用やプライバシーに関する問題、結果開示の時期などさまざまな問題点があるからだ。

そもそも全国学力テストとは何かというと、日本全国の小中学校の最高学年である小学校6年生と中学校3年生全員を対象として、文部省が2007年から行ったテストのことである。国語・算数／数学の2教科で、それぞれ基礎の「A問題」と応用の「B問題」の二種を課すものだ。1956年(昭和31年)から1966年までの間にも実施され続けていたが、小中学校だけでなく高校も調査対象になっていたこと、国語・数学だけでなく、社会科・理科(1957年調査など)や音楽・図工・家庭科(1958年小学校調査)などの多様な科目が対象となっていたことや、「抽出校」と自発的に参加する「希望校」が調査の対象であったことが現在とは違っている。

11年間にもわたって実施されていたこの学力調査だが、1967年から40年間も実施されていない。行われなくなった理由としては「学テ闘争」が挙げられる。全国の教員・学校職員による労働組合の連合体である「日本教職員連合」、通称「日教組」が試験当日に平常の授業を行い、全国学力テストには応じないという方針を立て、反対闘争を行ったのである。これを機に、長い間必要とされず実施されなかった。しかし、1999年ごろに起こった「学力低下論争」や2003年に実施された第二回PISA調査(国際比較学力テスト)の成績の低迷(図1)などを受けて、2007年に再開されることになったのである(清水2009)。

図1 PISA調査 日本の分野別平均得点と順位

	2000年調査	2003年調査	2006年調査
読解力	522点/14位	498点/14位 →	498点/15位 ↓
数学的リテラシー	577点/1位	534点/6位 ↓	523点/10位 ↓
科学的リテラシー	550点/2位	548点/2位 →	531点/6位 ↓

参考：リクルート進学総研 OEC D 生徒の学習到達度調査 (PISA)

([http://souken.shingakunet.com/career\\_g/2011/05/ocedpisa-f76b.html](http://souken.shingakunet.com/career_g/2011/05/ocedpisa-f76b.html) 2014/1/5 アクセス)

私はこの学力テストには反対であり、それには3つの理由がある。まず1つ目は、テストを行うにあたって多くの費用がかかるからだ。清水宏吉によればこの学力テストにかかる費用は70億円以上だという(清水2009)。これほどの費用をかけて1年に1回実施しているのだが、調査が始まった2007年とその翌年2008年の結果はほとんど変わらないのである。(図2)

図2 2007年と2008年の平均正答率の比較

	小学校調査				中学校調査			
	国語		算数		国語		数学	
	A	B	A	B	A	B	A	B
2007年	81.7%	63.0%	82.1%	63.6%	82.2%	72.0%	72.8%	61.2%
2008年 (前回比)	65.6% (-16.1%)	50.7% (-12.3%)	72.3% (-9.8%)	51.8% (-11.8%)	74.1% (-8.1%)	61.6% (-10.4%)	63.9% (-8.9%)	50.5% (-10.7%)

参考：国立教育政策研究所（2008）「平成20年度 全国学力・学習状況調査 報告書のポイント」

(<http://www.neir.go.jp/08chousakekkahoukoku/> 2014/1/5 アクセス)

文科省は全国の学校の実態把握を学力テストの目的のひとつとしているが、それほど変わらない結果しか出ないテストを毎年莫大な費用をかけてまで実施する意味はないだろう。

2つ目の理由は、児童生徒のプライバシー保護に不安があるためである。全国学力テストの採点や分析は小中それぞれひとつの民間企業に委託されている。小学校はベネッセコーポレーション、中学校はNTTデータ（2007年度）が採点、分析している。

教師の負担を増やさないという点では、民間企業に委託することは悪くないように思えるが、企業に渡されるデータというのはテストの回答だけではない。生徒や教師の名前、学校ごとの不登校者数などさまざまなプライバシーに関する情報まで把握されてしまうのである（尾木2009）。この情報がかつこころへ漏れるようなことがあると悪用されてしまう可能性があり非常に危険だ。民間企業に採点や分析を任せるのであれば、個人情報の管理は慎重にする必要があるため、今のままでは不安である。

そして3つ目の理由は、テストの結果の返却時期が遅いため指導に生かしくいからである。4月に実施される学力テストの結果が返ってくるのは半年後の10月ごろである。（尾木2009）

1年の半分が過ぎたこの時期に結果を返されても、教師は指導に生かしくい。また、受験した児童生徒らが半年も前のテストの復習をするにも記憶が薄れているだろう。

このように、全国学力テストは結果があまり変わらないのに毎年莫大な費用をかけて行われ、採点や分析は民間企業に委託されるために個人情報流出の恐れがある。さらに結果を返却する時期が遅いために指導にかしくい復習がしづらい。多くの問題を持つこのテストを続ける意味はないだろう。

以上のことから、私は全国学力テストの実施に反対する。

(1545字)

参考文献

- 1：清水宏吉 『全国学力テストーその功罪を問うー』（2009）岩波書店
- 2：尾木直樹 『「全国学力テスト」はなぜだめなのか ー本当の「学力」を獲得するためにー』（2009）岩波書店